

日本フランス語フランス文学会

cahier

04

septembre 2009

I 2009 年度春季大会の記録

特別講演 I Sublime, forcément sublime : *Corinne*

Philippe BERTHIER

司会・報告 小野潮 1

特別講演 II Des moralistes aux publicistes : Tocqueville et la littérature.

Françoise MÉLONIO

司会 三浦信孝 4

テーブル・ロンド L'Avenir de la culture française

Antoine COMPAGNON

中地義和

司会・報告 吉川一義 13

II 書評

髭郁彦、川島浩一郎、渡邊淳也『フランス語学概説』

小田 涼 16

ジャン=ブノワ・ナドー & ジュリー・バーロウ（立花英裕監修、
中尾ゆかり訳）『フランス語のはなし—もうひとつの国際共通語』

西村淳子 18

Keiko Tsujikawa, *Nerval et les limbes de l'histoire, lecture des
Illuminés*

田村 毅 19

石井洋二郎『ロートレアモン 越境と創造』

立花英裕 21

Masao Suzuki, J.-M.G. *Le Clézio, Évolution spirituelle et littéraire.
Par-delà l'Occident moderne*

中地義和 23

吉田城、田口紀子編『身体フランス文学 ラブレーから
ブルーストまで』

松澤和宏 25

柏木隆雄『交差するまなざし—日本近代文学とフランス—』

私市保彦 27

Makoto Kemmoku, Dominique Chipot, *Du rouge aux lèvres*

西岡亜紀 29

小畑精和、竹中豊（編著）『ケベックを知るための 54 章』

西川葉澄 31

I 2009年度春季大会の記録

特別講演 I

Sublime, forcément sublime : *Corinne*

Philippe BERTHIER (Université Paris III)

司会・報告 小野潮 (中央大学)

旅行ガイド、比較民族学の書物、フェミニズムのパンフレ、政治論、恋愛小説とさまざまな形容される『コリンヌ』はまた崇高についての哲学的、美学的研究であり、崇高こそがこの作品の一貫性を支えている。そこに見られる多くの二項対立（イギリス/イタリア、肉親の情/情熱、社会からの要求/自我の欲求）の根本にある対立は、崇高を受け入れるか拒絶するかということである。小説的虚構を通してスタール夫人はわれわれを崇高のあらゆる状態についての省察へと誘う。崇高に無縁の国から到着した男性主人公に同一化した読者は、崇高が自生している国を発見する。崇高の魅力を体現した女性に親しむことによって、読者は少しずつ崇高の意味、崇高の必要性を認識していくが、最後には修復不可能な破砕が崇高を殺し、沈黙に追い込んでしまう。

イタリア、崇高の祖国

われわれが発見するのは崇高が主人であり、まったく自明の国である。この南の国の日常、地中海でただ世界にあるという事態には幸福感があり、人を抒情的魂の震えに誘う。太陽の輝き、花々が与える陶醉、風景の多様性と豊かさといった驚異はそれ自体の素晴らしさが嘆賞されるだけでなく、人々をそれらを越えた何か、まさしく崇高の領域に属する何かへと導く。美しきものどもに注がれた視線はすでに崇高の準備過程であり、宇宙のより高度でより広大な次元の学習の始まりである。

レモンの香りを嗅ぐだけで、「詩的感興」を覚え、自らの才能が高揚するのが感じられる。イタリアの輝く空の下にいてだけで、靈感が働きだすのが感じられる。イタリアではもっとも慎ましい境遇の人々でも、ことさらに努めることもなく、豊かな表現に達する。スタール夫人が示唆しているのは、イタリアでは、世界の光景がそれだけで、崇高に特有の上昇の動きによって、感覚の酩酊を、光と熱と意味の普遍的で偉大な源泉への参与へと昇華するというのである。

彼らの生活そのものによって、イタリア人は崇高を受け入れる準備ができて

いる。精神が唯一の榮譽である女性詩人をイタリアの人々は称える。イタリア人が崇高の磁気を帯びるのは、自分たちが被った政治的な屈辱を晴らすためではない。イタリアのすべての社会階層が「想像力のあらゆる才能」への情熱を公言している。「ローマの民衆は芸術に通じ、彫像について、絵画について、歴史的建造物について、古代遺跡について趣味よく論じることができる。あるレベルに達した文学的才能は彼らにとって国民的関心の対象となる」。神々に祝福されたこの国では「想像力は神格化されている」。

こうした精神のありよう、自然な詩的潜在能力を動員するこの常なる能力が、イタリアに、他に比べようのない文化的遺産をもたらした。コリヌスはオズワルドをまず第一にサン=ピエトロ大聖堂とパンテオンに連れていくが、これらの建物は神聖なものにまで高まった人間の創造性の偉大さを示すものである。イタリアをその原型とするような、「歴史的国々」だけが人の心をとらえる。イタリアを越えることのできないものとしているのは、生のものと焼いたもの、自然の壮麗さと文化の輝きのこれ以上はないほどの婚姻である。

体現され行為する崇高

『コリヌス』においては崇高は抽象的議論の対象ではなく、肉体と声を持ったひとりの女性であり、磁力を帯びたその存在に近づくあらゆる人々に身体的効果、神経的震動を引き起こす。失望に満ちたローマ到着の翌日、オズワルドが目にするのはコリヌスのカピトールにおける桂冠詩人としての戴冠という、崇高を讃える賛歌であり、そこでは最高点に達した人類が、明るさに満たされて、精神の諸価値への同じ熱狂のうちに集っている。コリヌスは詩の到来を告げる靈感を受けた存在であり、精神的に傷ついた国にあって精神的エネルギーの炎を掻き立て、失墜に抗議し、過去の偉大さを呼び起こす。

コリヌスが人々の魂に働きかけるのは即興詩によってであるが、このことは彼女をデルフォイの巫女たちの偉大な口頭の伝統に結びつける。この巫女たちは神がかりとなって、彼女自身たちより遠いところからやってきたメッセージを伝える。熱狂(enthousiasme)というスタール夫人のテキストにとって枢要な概念がこの現象の中核にある。熱狂とはある瞬間に神が己のうちにいるということであり、その神の訪れがわれわれをわれわれ以上のものとする。

即興は単に美的なものであるにとどまらない。コリヌスの即興がすばらしいものとなるのは、美しい、調和に満ちた詩句を作った場合だけではなく、その詩句が万人にとっての一般的な真実を表しえた時である。したがって、美的な完成は精神的完成と歩みをともしるのであり、詩が美しいものとなるのは思考が高尚なものだからである。作品の質は内在的に詩を生み出す人間の精神生活の質に、その人間が自我の限界を越え、思考と普遍的諸価値の広大な地平に

対し自らを開かれたものにする能力に関係している。

このような理解と表現の能力は恩寵であり、秘跡である。スタール夫人にとっては崇高は「一種の衝撃であり、それは芸術においては理想の美の、孤独な魂においては宗教の、英雄にあっては高邁さの、人間たちの間にあっては無私の源泉」であり、根本的に宗教的なものである。

垣間見られた崇高の形而上的王国の光に照らしてのみ、われわれははかないわれわれの生活を永遠の展望のもとに置くことができ、それに意味を与えることができる。「宇宙にあって美は唯一のものであり、それがどんな形のもとに現れようと、それは人間の心に宗教的感情を呼び起こす」。美は芸術作品にも、壮麗な穹窿にも、文学の傑作にも、恋情にも宿る。魂を刺激し、われわれの内心から音を引き出すすべてのものは互いに響き合い、宇宙の中心の原初の火の輝きを掻き立てる。

スタール夫人は創造の迸りと宗教的高揚の融合という同じ信条を語り続ける。「あらゆる種類の崇高は神性の反映である」。誰でもが崇高に接する必要があることが、われわれはわれわれ自身より偉大であることの証左である。その人生の最後の段階に至ってもコリンヌは熱狂こそ彼女を支え続けた唯一の力であると公言する。「不死にふさわしい者となること、これこそ人生の唯一の目的だと私は思いたい。幸福も苦しみも、すべてはこの目的の手段なのです」。創造の尽きせぬ必要、感動の尽きせぬ必要にあっては、すべては魂を熱く燃やすための養分となる。だが靈感を受ける者はまたもっとも苦しみを感じやすい者である。一国民の全体が讃える崇高の勝利を高らかに謳い上げる『コリンヌ』は、また残酷にも、崇高の殉教を語る書物であり、崇高が現実あるがままの世界からは追放されることを語る書物でもある。

崇高は死に至らしめられる

コリンヌは崇高の栄光を一身に集め、人々の賞賛と同意を得る存在だが、同時に彼女は自分自身の才能に閉じ込められた存在であり、人々に理解もされなければ受け入れられもしない。それは、例外的な存在としてとどまることを運命づけられた天才の宿命的な孤独である。スタール夫人はコリンヌの運命を示すため、イギリスとフランスに挟まれたイタリアという、国名を用いた人間学上の三角形を用いる。想像力、靈感、創造を体現するイタリアが、フランスとイギリスの間に置かれた末に周縁に追いやられる。

エルフイユ伯爵に体現されたフランスは軽薄であり、素朴な優越感に支配され、陽気で機知に富むが、何事であれ深く考えられない。スイスの山の崇高さもローマの美術の崇高さも彼には知覚できない。

コリンヌの悲劇が演じられるのは、イタリアとイギリスという両立不可能な

二項対立においてである。イタリア流儀の崇高はイギリス風の社会には融合し得ない。イギリスの「国民精神」の完璧な被造物であるオズワルドには、魂にとって本質的なものである無益さに対するコリンヌの賞賛は理解できない。イギリスでは女性は家庭生活に押し込められ、女性と男性は明瞭に隔離され、男女の分離が欲望を日々埋葬している。イギリスでは社会規範が他のすべてのものに優越する。他者支配は完璧であり、自我は自分自身について何の権利も持たない。なぜなら期待されるのは、それぞれの人間が持っている能力の発揮ではなく、社会が定めた義務への完全な服従だからである。

こうしたモラルにとってはコリンヌは文化的道化役者であり、自分の能力の使い方を間違えた女でしかない。イギリスでは支配的な心情も、社会のあり方も、熱狂を葬り去ろうとするのであり、したがって崇高を葬り去ろうとするのである。崇高は異国趣味的な飾り物でしかない。

したがって、軽薄なフランスにおいても、義務というものについて誤った観念を持つイギリスにおいても崇高には生きるべき余地がない。義務というものを本来あるべき自分になることと考えるコリンヌはこのイギリス風の考え方に強く抗う。すべてを平準化しようとする近代においては、規範、すなわち特異性に対する憎しみと、疎外されることを拒否する自我のあいだにこの戦いの帰趨は明らかで、主体の願望は社会機構によって押しつぶされる。

しかもコリンヌの個人的運命も、彼女の本来的な崇高の圏域への所属を脅かす。それはある特定個人、しかも崇高とは無縁であるイギリス人に対する彼女の愛情である。愛は崇高と両立不可能なものではなく、むしろ愛は崇高を活気づけるものでさえある。しかし、そのような愛は広大なものに開かれていなければならない。

コリンヌは歌うのをやめる。崇高な声、崇高の声は沈黙を強いられる。『コリンヌ』がわれわれに語っているのは、崇高の敗北の過程なのであり、そこでは高次の生命の声が、凡庸の支配の犠牲になっているだけでなく、万人に訴えかける精神的価値を讃えるという使命とはおそらく両立しない個人的幸福を求めるというもっともな願いの犠牲になっている。

特別講演Ⅱ

Des moralistes aux publicistes : Tocqueville et la littérature

Françoise MÉLONIO (Université Paris IV)

司会 三浦信孝 (中央大学)

L'œuvre de Tocqueville appartient depuis longtemps au patrimoine japonais. *De la Démocratie en Amérique* (1835-1840), récemment retraduit par Matsumoto Reiji, avait été traduit, en extraits ou intégralement dès l'ère Meiji, par Obata Tokujiro en 1873 et par Koizuka Ryu en 1880; dans ces mêmes années sont traduits *De l'Esprit des lois* (1875, deux traductions par Kareishi et Suzuki Tadaichi), *Du contrat social* (1877 et 1882 par Nakae Chomin) et *l'Histoire de la civilisation en Europe* de Guizot (par Murota Jûbi en 1875 et par Nagamine Hideki en 1877). Sans doute le livre de Tocqueville, traduit d'abord à partir de l'anglais, n'a-t-il pas rencontré le succès du *Contrat social*. Mais le nom de son traducteur est significatif : Obata Tokujiro, professeur à Keio Gijuku, est un disciple de Fukuzawa Yukichi (1834-1901) le fondateur de l'université Keio, qui s'était rendu aux États-Unis en 1860, puis en 1862 avait participé à la première ambassade japonaise en Europe. Fukuzawa, écrivain politique comme Tocqueville, en partageait le souci de l'émancipation de l'individu et l'intérêt pour l'expérience américaine. La traduction des œuvres politiques françaises est un des signes de la curiosité pour l'Occident dans ce moment de Meiji où les réformateurs envisagent l'hybridation possible de la tradition japonaise avec l'individualisme moderne. L'œuvre de Tocqueville a ainsi contribué — modestement — à la réflexion japonaise sur l'émancipation moderne de l'individu, dont Kato Shuichi a montré l'importance, dès Meiji puis de Natsume Soseki (*Mon individualisme*, 1915) jusqu'à Maruyama Masao. Ne majorons pas le poids au Japon de la pensée libérale française. Ce qui depuis 1945 a séduit les Japonais comme les Américains, dans la littérature française, c'est plutôt le radicalisme contestataire d'un Sartre, si exotiquement « français ». Reste qu'il y a eu un dialogue précoce et durable entre les publicistes français et les publicistes japonais qui a joué un rôle important dans la transition démocratique inaugurée par Meiji¹.

Dans ce dialogue, la part des spécialistes de littérature française a été, disons-le, trop réduite. Le bilan de *Cent ans d'études littéraires au Japon* (publications de la maison franco-japonaise, 1973) répertorie les traductions de Montesquieu ou Rousseau, mais de Tocqueville, pas un mot, pas davantage que d'autres historiens français majeurs comme Augustin Thierry, Thiers et Guizot. Parmi les publicistes français du 19^{ème} siècle, Benjamin Constant, M^{me} de Staël sont sauvés pour avoir écrit des romans ; Chateaubriand pour *Atala*, *René* ou les *Mémoires d'Outre-tombe*, pas pour ses pamphlets politiques ou ses travaux d'historien. Tocqueville dont les livres relèvent du

¹ Voir Jean-Marie Thiebaud, *La présence française au Japon, du XVI^{ème} siècle à nos jours*, Foreign language study, 2008, 477p.

genre de l'essai ou des Mémoires est resté extérieur au canon, dans les études littéraires au Japon, comme en France. Une telle exclusion n'a été remise en cause que tout récemment. Marc Fumaroli est venu parler au Japon de Tocqueville et de Chateaubriand, tandis que *De la Démocratie en Amérique* était en France mis au programme de l'agrégation de philosophie et de celle de lettres (2005). Il est vrai que 2005 était le bicentenaire de la naissance de Tocqueville et que la mémoire littéraire en France se nourrit de célébrations... Cet intérêt nouveau n'en marque pas moins un déplacement des frontières dans la cartographie de l'espace littéraire qui tend à inclure aujourd'hui les récits de voyage, écrits historiques et essais, en prenant ses distances avec la conception de la littérarité triomphante dans les années soixante-dix, et dont les conséquences ont été dommageables. «La littérature en soi, et dans sa forme traditionnelle, tient une place de plus en plus restreinte dans la culture et dans la pensée»² écrivait Roland Barthes en 1976. L'élargissement récent du canon aux essayistes, invite à ne pas séparer la littérature de la pensée, ni la littérature pure de la littérature impure. Par où nous faisons retour à une conception de la littérature qui fut dominante jusqu'au 19^{ème} siècle.

Mon propos ici sera donc double : montrer comment au 19^{ème} siècle la littérature politique s'inscrit dans l'espace littéraire et reprend la place occupée par les moralistes dans la littérature classique ; montrer comment cette littérature porte une ambition autre que celle de nos modernes sciences sociales, et tire sa force théorique de son caractère littéraire.

Littérature et politique au 19^{ème} siècle : l'âge de l'éloquence.

Rappelons d'abord que durant toute la première moitié du dix-neuvième siècle la littérature se définit encore comme Éloquence ; les lettres, comme l'a montré Marc Fumaroli, c'est le bien commun d'une culture religieuse, morale et politique. Il faut attendre les années 1880 pour que l'émergence des sciences humaines — science politique, sociologie, psychologie s'accompagne d'une fragmentation du discours littéraire en discours spécialisés et d'un repli, moins rapide et complet qu'on ne le prétend d'ailleurs, de la littérature sur le territoire étroit de la littérature « pure ». La période où Tocqueville publie *De la Démocratie en Amérique* (1835-1840) est précisément le moment où la littérature commence à se définir comme « art littéraire » et où apparaît la distinction entre ce qu'on appelle alors les « publicistes », éloquents, et les « purs littérateurs ». Mais ils sont encore assez proches pour s'envier et rivaliser pour les mêmes honneurs. Rien de mieux pour saisir cette concurrence à l'intérieur d'un champ littéraire unique que de regarder la littérature satirique. En 1843 dans la *Monographie de la presse parisienne*, Honoré de Balzac s'en prend à « l'écrivain

mono-bible » c'est-à-dire celui qui auteur d'un seul ouvrage n'en parvient pas moins à l'Académie : « Quand un homme a fait un livre ennuyeux, tout le monde se dispense de le lire et dit l'avoir lu. On devient alors l'homme d'intelligence que la Bourgeoisie recherche, car elle veut tout à *bon marché* : le gouvernement, le roi, l'esprit et le plaisir. Faire un livre à la fois moral, gouvernemental, philosophique, philanthropique, d'où l'on puisse extraire, à tout propos et à propos de tout, quelques pages plus ou moins sonores, devait être un excellent point d'appui. On ne laisse plus alors prononcer son nom qu'accompagné de cette longue épithète : MONSIEUR MARPHURIUS QUI A FAIT DE L'ALLEMAGNE ET DES ALLEMANDS. Cela devient un titre, un fief. Et quel fief ! Il produit une foule de décorations envoyées de toutes les cours, il donne hypothèque sur une classe quelconque de l'Institut. »

On aura reconnu Tocqueville qui grâce à la seule *Démocratie en Amérique* parvint en 1842 à être reçu à l'Académie où Balzac n'entra jamais. La caricature qui illustre le texte ôte d'ailleurs tout doute sur l'identification...



Balzac ne serait pas si envieux, s'il ne se situait dans le même champ que Tocqueville. La concurrence est d'autant plus vive que la polygraphie est la règle puisqu'on est souvent à la fois poète, dramaturge, romancier, orateur... Balzac écrit des lettres politiques et aurait aimé être député et académicien ; Stendhal, férù d'économie politique, obsédé par les États-Unis quoiqu'il n'y soit jamais allé, est l'auteur d'articles de journaux et de pamphlets ; Chateaubriand est la figure du grand écrivain à la française conjuguant les bonheurs de l'amour, l'ambition politique et la

gloire de l'écrivain ; Hugo et Lamartine sont l'un et l'autre de très grands orateurs, non pas malgré leur génie poétique comme on le dit souvent, mais grâce à leur génie poétique. Zola ne rompt pas avec cette tradition lorsqu'il intervient politiquement dans l'affaire Dreyfus, en utilisant toutes les ficelles du roman noir pour raconter les intrigues des adversaires de Dreyfus, et en mettant son prestige immense de romancier au service de la Justice.

On sait moins que ceux qui ont laissé un nom dans l'histoire comme politiques ou historiens, écrivaient souvent aussi des romans, poèmes et vaudevilles, et pas seulement par erreur de jeunesse ou divertissement de salon. Benjamin Constant traduit Schiller, écrit *Adolphe*, et des textes constitutionnels ; Guizot, le ministre le plus éminent de la monarchie de Juillet, est l'auteur à succès de pamphlets politiques, de travaux majeurs en histoire, d'une longue et remarquable préface aux œuvres de Shakespeare qui inspira Hugo, d'une étude sur Corneille, d'un dictionnaire des synonymes... ; ce n'est pas une singularité française : Disraeli, le célèbre ministre anglais, trouva aussi beaucoup de lecteurs pour ses romans—*Coningsby* (1844), *Sybil* (1845), *Tancred* (1847) ou *Lothair* (1870). Reste que la tradition des ministres — écrivains, ou des hommes politiques-écrivains est plus forte en France qu'ailleurs et perdure d'ailleurs chez les présidents de la V^e République. En France, nation littéraire, le goût des lettres et la pratique des lettres semblent inséparables de la réflexion sur le pouvoir et de son bon exercice, au point qu'un Président ne peut remettre en cause sans scandale la nécessité de connaître ses classiques.

Le champ littéraire du 19^{ème} siècle inclut donc, non sans conflits et contestations, aussi bien la fiction que l'essai qui s'éclairent mutuellement. La définition de la littérature reste largement celle des siècles classiques, mais la place occupée par les moralistes est désormais prise pour une large part par ce qu'on appelle les « publicistes », catégorie un peu floue qui renvoie à la fois à la publication dans les journaux et à l'essor d'une littérature d'idées qu'on considère souvent comme l'archéologie de nos sciences sociales et qui s'éclaire tout autant en la confrontant à ses origines classiques.

Des moralistes aux publicistes ou de Pascal à Tocqueville.

La filiation entre moralistes classiques et publicistes est un lieu commun des critiques au 19^{ème} siècle. Elle a paru particulièrement nette s'agissant de Tocqueville en qui ses contemporains saluent à la fois le nouveau Montesquieu et une « sorte de Pascal politique » : « À chaque page en le lisant, on se ressouvient de ces mélancoliques paroles de Pascal dont plus que personne il aurait eu le droit de faire sa devise : je blâme également et ceux qui prennent le parti de louer l'homme, et ceux qui le prennent de le

blâmer, et ceux qui le prennent de le divertir, et je ne puis approuver que ceux qui cherchent en gémissant²».

Des moralistes Tocqueville reprend la posture. Il porte sur la démocratie le regard distant et volontiers ironique que les moralistes portent sur l'homme. Pascal jugeait l'homme avec la distance que donne le point de vue de l'éternité. Tocqueville juge la démocratie américaine avec une double distance sociale et historique. Aristocrate, arrière-petit-fils de Malesherbes, et cousin de Chateaubriand, il ne voit la culture démocratique qu'à travers l'ombre portée par une ascendance aristocratique. Français, il visite les États-Unis durant neuf mois en 1831-1832 non pour y trouver un modèle, tant l'expérience de l'absolutisme et de la Révolution rend impossible une importation de l'expérience américaine mais pour y chercher des leçons et des avertissements. Le publiciste Tocqueville est donc bien l'héritier des moralistes : il est celui qui est dedans et dehors³. Un outsider. Un « jeune vieillard » : les contemporains de Tocqueville utilisent à son propos le topos du « puer senex » analysé par Curtius ; Tocqueville est celui qui tout jeune (né en 1805 et célèbre à trente ans) est déjà sage parce qu'il a l'expérience du passé.

On pourrait pousser l'analogie et chercher chez Tocqueville tout ce qui le rapproche d'un Pascal, d'un La Bruyère ou d'un La Rochefoucauld ; Pascal se déclarait « embarqué » dans un monde humain de ténèbres, et invitait à parier sur Dieu. Tocqueville se clame embarqué, poussé « à reculons vers des abîmes » dans le monde démocratique, et appelle à parier sur la liberté dont Dieu est l'ultime garant. C'est précisément cette distance qui lui permet d'imaginer le monde démocratique encore en gestation et de s'adresser à tous ceux qui voient s'effondrer la société hiérarchique et se soucient de l'organisation de la démocratie : français, allemands ou russes, japonais du 19^{ème} siècle. « Où allons-nous donc ? » leur demande Tocqueville, sommant son lecteur de choisir entre Lumières et barbarie. Car la démocratie est à la fois misérable et sublime, comme l'homme est pour les moralistes misérable et capable de Dieu.

Misérable, car Tocqueville reprend le vieux thème antique et classique des moralistes : l'homme est en ce monde terrestre un voyageur égaré (*homo viator*). La

² Jules Levallois, *L'opinion nationale*, 5 mai 1861. Jules Levallois était secrétaire de Sainte-Beuve lorsque celui-ci rédigeait son *Port-Royal* secrétaire de Sainte-Beuve. Sur Tocqueville moraliste, voir le livre remarquable de Laurence Guellec, *Tocqueville et les langages de la démocratie*, Champion, 2004.

³ Voir Louis Van Delft, *Le moraliste classique. Essai de définition et de typologie*, Droz, 1982.

préface à la *Démocratie* de 1835, la grande conclusion de la *Démocratie* de 1840 orchestrent dramatiquement ce thème : « placés au milieu d'un fleuve rapide, nous fixons obstinément les yeux vers les quelques débris qu'on aperçoit encore sur le rivage, tandis que le courant nous pousse à reculons vers les abîmes⁴. » Pour les moralistes classiques la vie humaine était une douloureuse traversée de ce monde terrestre en attendant l'au-delà ; pour Tocqueville le thème de l'homo viator renvoie moins à des considérations métaphysiques qu'à la situation historique spécifique de l'homme démocratique. Un des traits majeurs de la démocratie c'est que l'héritage du passé n'y éclaire plus l'avenir et que tout devient instable, l'individu autant que la société. Tocqueville s'inscrit dans la lignée des moralistes qui ne croient pas à une forme stable de l'être, comme Montaigne ou Pascal. C'est pour lui, comme pour Benjamin Constant, une expérience intime et douloureusement vécue que de s'échapper à soi-même. Mais cette maladie intime de l'inquiétude est une épidémie historique qui frappe collectivement les hommes démocratiques. Si tous n'en sont pas conscients, tous en sont atteints. Le 18^{ème} siècle avait cru en la perfectibilité de l'homme avec une confiance exagérée. Les hommes du 19^{ème} siècle s'abîment dans le désespoir par incapacité à satisfaire l'immensité de leurs désirs. Aussi bien l'envie est la passion démocratique majeure ; l'égalité avec le voisin « fuit comme dit Pascal d'une fuite éternelle ». Le monde décrit par Tocqueville est celui même des romanciers, de Balzac, Stendhal ou Flaubert, un monde instable où l'individu s'émancipe en même temps qu'il s'isole. Tocqueville repère partout ce qu'il appelle la « situation ambulatoire » du monde moderne. En littérature les lecteurs « cherchent surtout de l'inattendu et du nouveau » (p. 571). Ils goûtent l'enflure romantique et la néologie : « le mouvement perpétuel qui règne au sein d'une démocratie, tend [...] à y renouveler sans cesse la face de la langue comme celle des affaires. » (p. 577) Dans l'ordre intellectuel et artistique, comme dans l'ordre social les rangs se confondent, les frontières s'effacent et le sens se perd. Les langues démocratiques—et ceci est particulièrement caractéristique de l'anglais—s'abandonnent à une polysémie exubérante et mêlent tous les niveaux de langue—langue savante et langue vulgaire, langue des pauvres et langue des riches ; reste « une masse commune où chacun prend à peu près au hasard » (p. 580). Admirable analyse du rétrécissement du temps au présent, du renoncement aux « longs désirs » et aux « vastes pensées ». Au terme du voyage terrestre, les moralistes plaçaient la mort. À la fin de l'histoire, Tocqueville imagine un despotisme inouï : « je veux imaginer sous quels traits nouveaux le despotisme pourrait se produire dans le monde : je vois une foule

⁴ Tocqueville, *Œuvres*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, tome II, 1992. Le premier volume est publié par Tocqueville en 1835, le deuxième en 1840. Citation p.8.

innombrable d'hommes semblables et égaux qui tournent sans repos sur eux-mêmes pour se procurer de petits et vulgaires plaisirs dont ils emplissent leur âme. Chacun d'eux, retiré à l'écart, est comme étranger à la destinée de tous les autres [...] il n'existe qu'en lui-même et pour lui seul, et s'il lui reste encore une famille, on peut dire du moins qu'il n'a plus de patrie. Au-dessus de ceux-là s'élève un pouvoir immense et tutélaire, qui se charge seul d'assurer leur jouissance et de veiller sur leur sort. Il est absolu, détaillé, régulier et doux. Il ressemblerait à la puissance paternelle si, comme elle, il avait pour objet de préparer les hommes à l'âge viril ; mais il ne cherche, au contraire, qu'à les fixer irrévocablement à l'enfance ;[...] »⁵

Mais il faut voir « l'autre côté du tableau » : la **grandeur de la démocratie**. Si l'homme démocratique s'élève, Tocqueville l'abaisse, mais s'il s'abaisse, il le relève. Car si, d'ordinaire, la démocratie manque d'infini, elle est aussi capable de sublime. Aucun régime social n'est aussi favorable à la grandeur de la pensée : « je ne vois rien de plus admirable, écrit Tocqueville, ni de plus puissant qu'un grand orateur discutant de grandes affaires dans le sein d'une assemblée démocratique. Comme il n'y a jamais de classe qui y ait ses représentants chargés de soutenir ses intérêts, c'est toujours à la nation tout entière, et au nom de la nation tout entière que l'on parle. Cela agrandit la pensée et relève le langage. » (p. 605) La démocratie est ce régime social où, tous les hommes se ressemblant, on peut parler à l'Humanité. L'homme démocratique apparaît ainsi comme l'homme dans la plénitude de sa nature, une fois dépouillé de tous les accidents dus à l'âge, le rang, la race qui le défigurent : aussi bien on peut dire que c'est dans le discours sur la démocratie que le discours moraliste trouve sa véritable généralité. Les classiques croyaient parler de la nature humaine mais ne s'adressaient jamais qu'à ceux de leur ordre; seul le penseur de la démocratie peut atteindre l'Universel.

La nature de la démocratie, qui peut conduire à la servitude ou à la liberté, aux lumières ou à la barbarie détermine la **mission du moraliste ou du législateur** — l'un préparant le travail de l'autre. Les sociologues contemporains comme Raymond Aron ou Jon Elster ont reproché à Tocqueville le flou de ses concepts, et les contradictions de son discours. C'est que l'écriture de Tocqueville vise à l'éloquence, et ne relève pas seulement de la science. Son but est d'abord de détruire la fascination de la modernité démocratique sur les esprits. D'où le recours à tous les tropes de la distance — antithèses, oxymores — qui émancipent le lecteur de l'évidence trompeuse de la démocratie. N'en donnons qu'un exemple, tiré de *L'Ancien Régime et la Révolution* (1856) : « il n'y a rien de moins indépendant qu'un citoyen libre ». À l'homme

⁵ *Ibid.*, pp. 836-837.

démocratique par nature individualiste, Tocqueville rappelle que la liberté n'existe pas sans esprit citoyen.

À la démocratie Tocqueville propose donc une forme nouvelle, historisée et politisée, du discours moraliste. Il faut parier, sur une grandeur à laquelle notre monde démocratique ne nous prédestine pas. Mais cela, il faut l'écrire prudemment : l'art d'éduquer les hommes démocratiques s'accompagne de l'acceptation attristée de ce qu'ils sont ; le style de Tocqueville est inséparable d'une éthique de la prudence, dont il a fait son programme politique. Rien n'y invite à la fusion entre auteur ou lecteur, tant la liberté se nourrit de la distance critique et du débat. Cette écriture classique parce que rétive aux emportements, jouant de l'effet de sourdine, peut sembler manquer de charme, comme les femmes américaines, si raisonnables, selon Tocqueville. La littérature est au service d'une conversation publique, seul parapet contre le despotisme. Elle donne le désir de la politique, elle n'en impose pas le programme.

On voit combien l'œuvre de pensée, écrite pour agir sur l'opinion publique, tire sa force de son caractère littéraire. *De la Démocratie en Amérique*, inlassablement revisité, dépasse son temps et s'ouvre au conflit des interprétations en raison même d'une écriture qui permet d'accéder à la généralité. Les questions que pose Tocqueville et qui sont encore les nôtres sont aussi celles de ses contemporains ; romans, essais, histoire s'éclairent mutuellement. Il faut accepter la littérature « impure » pour comprendre la littérature.

La réintroduction souhaitable dans le canon des études littéraires françaises de la littérature politique du 19^{ème} siècle a, me semble-t-il, un intérêt tout particulier au Japon. Dans un livre classique et controversé, *Le Chrysanthème et le Sabre* (1946), Ruth Benedict s'inspire de Tocqueville pour différencier l'individualisme démocratique américain et la logique de l'honneur ou de la honte qu'elle repère dans les sociétés hiérarchiques de France et du Japon. La démarche comparatiste de Tocqueville qui cherche une voie française pour s'accommoder de la démocratie universelle et combiner l'émancipation de l'individu avec des valeurs aristocratiques n'est pas sans analogie avec l'histoire de la culture japonaise qui trouve sa force dans des hybridations réussies, comme l'a montré Kato Shuichi. Nos deux littératures sont obsédées depuis plus d'un siècle par le désir d'émancipation et la nostalgie du monde que nous avons perdu. Si bien que lire à la fois Constant, Guizot, Tocqueville, et Fukuzawa, Natsume Soseki, Maruyama Masao... c'est mieux comprendre ce qui rapproche et sépare nos deux traditions.

L’Avenir de la culture française

Antoine COMPAGNON (Collège de France)

中地義和 (東京大学)

司会・報告 吉川一義 (京都大学)

フランス文化の将来

世界規模でのフランス文化の影響力低下が指摘されている。日本でも、フランス語フランス文学を専攻する学生数や、翻訳されるフランス小説の販売部数などに顕著な減少を認めざるをえない。文学や哲学の領域でとくに深刻に感じられるこのような退潮の指摘は、根本的变化を反映したものなのか。そうだとすると、その原因はどこにあるのか。フランス文化それ自体の衰退なのか。文学を核とする伝統的教養の失墜なのか。それとも世界経済のグローバル化と、英語一極集中がもたらした必然なのか。文化や教養が軽視されるなか、フランス語フランス文学の研究教育がこれから果たすべき役割はなにか。

以上のような問題設定をめぐり、2009年5月24日(日)、中央大学後楽園キャンパスで開催された日本フランス語フランス文学会春季大会にて、アントワヌ・コンパニョン氏(学術振興会の「外国人著名研究者」枠により来日中)、および中地義和氏をパネリストに迎え、吉川一義の司会でターブル・ロンドを開催した。約200名の聴衆をえて、盛会であった。

問題の発端となったのは、アメリカ人ジャーナリスト、ドナルド・モリソンが12月3日付「タイム・マガジン」ヨーロッパ版に発表した「フランス文化の死」という文章である。戦後から一貫して世界の文化をリードしてきたフランス文化(文学作品の翻訳をはじめ、ヌーヴェル・ヴァーグなどの映画、グレコなどのシャンソン、イヨネスコなどの不条理演劇、カミュやサルトルの実存主義、フーコーなどの構造主義、デリダの脱構築、さらにはファッションや、料理など)に、この十数年、活気がなく、もはや世界の文化を主導する力を失っているというのだ。これが発表されると、挑発的なタイトルも手伝い、フランスの新聞雑誌で活発な論争がくり広げられた。コンパニョンはその論客のひとりで、その主張は、モリソンの警鐘とともに1冊の本にまとめられた(Donald Morrison, *Que reste-t-il de la culture française*, suivi de *Le souci de la grandeur* par Antoine Compagnon, Denoël, 2008)。

コンパニオン氏は、最初の総括講演で、この問題をめぐるフランスでの論争を整理したあと、つぎのような論旨を展開した。たしかに近年の欧米や日本で、フランス文化の存在感が減少していることは否めない。イタリアの中等教育では英語以外の外国語が必修から外されそうな雲行きであり、日本の大学では第二語学が軽減化されるなど、世界の教育機関でフランス語の後退がつづく。アメリカや日本では、フランス小説の翻訳出版が低調である。世界の人々から愛されているのは過去のフランス文化（ゴシック教会、ロワールの城館、ルーヴルやオルセーなどの美術館、ドビュッシーやラヴェルの音楽、ヌーヴェル・ヴァーグの映画など）であり、現代の作家は大きな影響力をもたなくなっている。

これにはさまざまな要因が考えられるが、とくにフランス文化の中心に位置づけられていた語学・文学と、それを一体として受容してきた文献学的教養が衰退したこと、それと平行して、ラテンアメリカ、アジアなど、非西欧文化が台頭したこと（フランスでは、村上春樹などの日本文学の翻訳が隆盛をみている）、さらにグローバル化したポストコロニアルの世界では、旧来の国民文化の価値が否定されがちなこと、などが指摘できる。また、1980年代にフランスの文化政策が、それ以前の文学・芸術中心の文化の普及（万人のための文化）から、若者文化やゲイ文化や落書など、さまざまな個別文化現象の是認（万人による文化）へと転換したこともある。文学を中心とするフランス文化の普遍的特権が終焉したのには、このような背景があるから、生じているのはフランス文化の「衰退」ではなく、むしろ「正常化」である。世界におけるフランス文化は、かつての特権が失われ、政治力と経済力に見合った位置を占めることになったのではないか。

中世から20世紀にいたるまで、フランス語・フランス文学を一体のものとして文化の中心に据えてきたフランスにとって、これはたやすく容認できない事態である。そこで現実を直視しない反論が出てくる。それだけでなく、アメリカで幅をきかす文化の商業化、映画の入場者数、本の販売部数、芸術家の人気など、目先の大衆の消費指標は、かならずしも長期的視野にたつ文化の価値と合致しないのではないかという反論もありうる。真の芸術の価値はすぐに認められないものだから、すぐ売れるのはよくない兆候だという昔からある議論である。ところが重要なフランス文化は、むしろ外国でいち早く認められたのである（たとえばブルーストは、フランスよりも、むしろドイツ、英国、米国、日本で、いち早く認められた）。私としては、悲観主義に陥ることなく、フランス文化の現状を冷静に見据えたい。

そのうえでフランス文化の将来に危惧を覚えるのは、手厚い国家の保護である。そのためフランスの芸術（映画、演劇、ダンス、出版）が市場と向きあうことなく、細々と暮らしてゆけることになり、かえって国際競争力を弱めている面があるのだ。とはいえフランス政府の文化予算が、最近、大きく削減され

たのは不安要因である。文化の将来にとって、国家による保護策がいいのか、アメリカ流の自由競争がいいのかは、議論の分かれるところであるが、魅力的な大作家が出現しないと、過去の文化遺産に関心をむける者も少なくなる。フランス革命と啓蒙主義の伝統に立つフランス文化の普遍性は終焉し、現代の芸術は内向きで小粒になっているが、この殻をやぶる天才の出現で事態が一変する可能性もあるのではないか。

以上のようなコンパニオン氏による総括を受け、中地氏は、日本におけるフランス文化の現状を分析し、その将来の展望を素描した。第一に指摘すべきは、フランス小説翻訳の出版不振である。1963年から1978年にかけて出版された白水社版「新しい世界の文学」では、81巻中、32巻がフランス文学であり（シモン『フランドルへの道』、グラック『半島』など）、日本における現代フランス文学の黄金時代であった。ところが1978年から1997年に刊行された新潮社の「現代世界の文学」では、フランス文学は46巻中、9巻を占めるにすぎず（ジュネ、ロブ＝グリエ、ル・クレジオなど）、大多数は英米ないしラテンアメリカの文学である。1998年から出版された「新潮クレストブックス」では、10年間に出た64篇のうち、フランス文学はわずか3篇を数えるにすぎない。このようにフランス文学翻訳の比率は、40%から20%へ、さらに5%へと低下したのである。

第二に、フランス語教育をみると、日本の大学は1991年の設置基準の「大綱化」と、それににつづく「法人化」および「大学院重点化」により大きく変化した。多くの大学で第二外国語が必修から外され、目先の専門教育が重視されるあまり、一般教養、ひいてはフランス文学の教育が軽視されるようになった。また大学院の拡充により、多数のオーバー・ドクターが生み出され、学生が研究者の道をさける要因になっている。文学を専攻する者が減り、それが日本フランス語フランス文学会の会員数減少にもつながっている。

第三に、1980年代から日本の若者の知的好奇心が目に見えて減退しているのが心配である。文学ではなく、むしろ映像に、西洋文化ではなく、むしろ近くのアジア文化に親近感を覚えるようになったのは、この時期の日本の経済安定と関係するのかもしれない。

第四に、悲観することなく、いくつかの明るい要素も指摘したい。ひとつは新しいフランス文学の翻訳が読まれていることである（河出書房の「二十世紀世界文学全集」、光文社の「古典新訳文庫」、宮下志朗氏によるラブレーとモンテーニュの新訳など）。また第二外国語もできるだけ必修にして、多くの学生に新しい言語の魅力を発見する契機を与えるとともに、高校でもフランス語教育を拡充すべきだと考える。さらにフランス語フランス文学の専攻学生が、第二の専門も修め、視野を広げることも必要であろう。われわれとしても、専門の

研究だけでなく、フランス文学の普及にも力を注ぐべきである。

以上の二氏の発言を受け、司会の吉川から文学の重要性についてコンパニオン氏に質問をし、数名の会員から有益な指摘や質問があった。問題の背景と論点は整理することができたが、充分な討論の時間がとれなかったのが残念である。

II 書評

髭郁彦、川島浩一郎、渡邊淳也『フランス語学概説』三恵社、2008年

評者：小田涼（関西大学非常勤講師）

本書は、フランス語学のさまざまな分野の問題や専門用語を網羅的に解説する日本で初めての入門書である。フランス語学の入門書としては、これまでも、フランス語史やフランス語学史を略述した書物や、語法や文法など個々の具体的な問題を扱う論文を集めた書物などはあったが、「フランス語学概説」や「フランス語学概論」と呼べるような書物はほぼ無きに等しかった。本書の前書きにおいて、共著者たちは次のように述べている。概説という名のついた授業で担当教員が自分の専門とする分野や理論だけを講じるのは、教員の個人的な関心の領野に学生を閉じ込めることになるばかりか、実際には広範で多様な研究領域を不当に狭めて見せることにより学問そのものに対しても不誠実になりかねない、と。耳の痛い指摘である。広くフランス語学のさまざまな領域を紹介しようという趣旨のもとに編まれた本書は、「第1章：序論、第2章：フランス語圏、第3章：フランス語史、第4章：音声学・音韻論、第5章：形態論、第6章：統辞論、第7章：意味論・語彙論、第8章：語用論、第9章：文体論、第10章：社会言語学と心理言語学、第11章：ポリフォニーと対話、参考文献」という構成からなる。この構成から見て取れるように、本書は、狭い定義でのフランス語学に限定することなく、文学や心理学、社会学、哲学といった種々の人間科学と言語学との接点を幅広い視野から紹介しており、学問の多様性を示すことに成功している。

本書はフランス語学入門の教科書であるだけでなく、教養書として読まれることも可能であるが、この書評では以下、主に教科書として本書をとらえた場合の特徴・利点について述べたい。本書は言語学の専門用語およびいくつかの事例研究を簡潔に説明・紹介したコンパクトな概説書なので、言語学の基礎知

識のまったくない学部が内容をすんなりと理解するのは、項目によっては難しいかもしれない。しかし、だからこそ授業の教科書としてふさわしいと言えるだろう。初心者向けにあらゆる項目について懇切丁寧に解説する本であれば、読んだ学生が（真面目に本を読んだと仮定すると）すべてを理解できてしまうから、授業での説明が余剰なものになってしまうからである。ある程度、教師の裁量で自由に内容を補強（もしくは省略）できる本の方が、授業の教科書としては使いやすいと思う（しかし同時に教師の力量が問われることにもなるので、不勉強で未熟な評者は戦慄を覚える）。

本書で説明される言語学の専門用語・基礎知識は、フランス語またはフランス語学に特徴的なもの（例えば脱落性の *e* やリエゾン、アンシェヌマンなど）ばかりでなく、言語一般に普遍的に見られる現象にまつわるものが数多くある。一般言語学とフランス語学とを切り離すことはできないのだから、これは自然なことである。また、一般言語学のさまざまな専門用語についてもできる限りフランス語の例を挙げて説明がされているため、一般言語学とフランス語学の知識を関連づけて得ることができる。各用語のフランス語名称がぬかりなく記載されているのもありがたい。さらに本書では、専門用語の解説だけでなく、よりフランス語学的な事例研究もいくつか紹介されている。例えば、第7章では *pied* や *créneau*、*éprouver*、*toujours* の語義分類についての研究が、第8章ではフランス語の丁寧の半過去・語調緩和の半過去・接客の半過去についての研究が紹介されており、このように具体的なフランス語学の問題に触れることで、言語学における実際的な問題の論じ方、論理の展開方法が感得できるよう工夫されている。

ところで、近年出版されている独習者向けの外国語教材には、親しみやすい語り口で文法や用語・現象を解説することで、学問への敷居を低くしようとするものがある。学習内容を（少なくとも部分的には）平易にすることを余儀なくされるこうした姿勢は恐らく、外国語教育の分野に限らず、その他のさまざまな学問領域においても多かれ少なかれ共通して見られる傾向ではないだろうか。しかし本書は、そうした風潮に反旗を翻し、いたずらに学習者におもねることなく言葉を選んで書かれた硬派な書物である。論文の体裁で書かれている本書は、読者によってはとっつきにくいと感じるかもしれないが、まさに本書によって論文の書き方を学ぶことができるという利点があることを強調しておきたい（学生からエッセイのような言語学のレポートを提出されて愕然とした経験のある教師なら、この意味を理解してもらえよう）。無駄な説明をそぎ落とし、広範な言語学の種々の問題を簡潔に解説する本書の姿勢は、裏を返せば、学習者に対する信頼感の現れとも言えるのである。

ジャン=ブノワ・ナドー & ジュリー・バーロウ (立花英裕監修、中尾ゆかり訳)
『フランス語のはなし—もうひとつの国際共通語』大修館書店、2008 年

評者：西村淳子（武蔵大学）

一つの言語が国際社会の力学の中でどのようなあり方をしているかということとは見えにくいものであるが、この本は、著者自身が世界中を旅して丹念にフランス語を話す人びと（フランコフォン）の足跡を取材しながら、フランス語の歴史と現状を捉え直そうとする試みである。著者はカナダ人のカップルで、フランス語を母語とするジャン=ブノワ・ナドーも、英語を母語とするジュリー・バーロウも、英仏両方の言葉で記事を書くジャーナリストである。本書はもともと英語で書かれており、立花英裕監修、中尾ゆかり訳による日本語版は英語版（*The Story of French*, 2006）からの翻訳である。仏語訳も 2007 年に出版されている（M. Saint-Germain 訳 *La Grande Aventure de la langue française*）。世界におけるフランス語の過去と現在に光を当て、世界共通語としてのフランス語の発展を応援する行動の書であるが、目の付け所の的確さは、長年フランス語を研究している人にとっても、また、英語で読めるのでフランス語を知らない人にとっても、多くの情報と発見があるはずである。

本書の構成は基本的には時間軸に沿って、フランス語の「誕生と成立」（第 1 部）、「世界各地への拡がり」（第 2 部）、「世界に根を下ろすフランス語」（第 3 部）、「変わる世界、変わることば」（第 4 部）に分かれている。とりわけ、新鮮な見方が窺えるのが、英語との歴史的にも複雑な影響関係や旧植民地などフランスの外でのフランス語話者たちの辿った歴史についての考察、フランス語特有の純粋主義にまつわる神話への批判などである。

フランス語は、政治的な力学により 18 世紀に一旦はヨーロッパ唯一の外交語となる。しかし、数々の戦争で国力が衰退すると世界共通語第一位の地位を徐々に英語に譲ることになる。それでも著者は英語の影響力の増大が必ずしもフランス語の影響力の低下につながっていないという。そもそも「ひとつの言語の伸張はかならずほかの言語の犠牲によって生じると思っている人が少なくないが、私たちが見たところ、そんなことはまったくありえない。」(p.265) アルジェリア、セネガル、インド、ポリネシアなど多くの国では、二言語使用の状況が認められる。もっと深刻な問題は、貧困化が教育制度全体の衰退を招き、英語もフランス語も衰退する可能性があることだと指摘している。

本書の二つ目の特徴は、フランス以外のフランコフォンに光を当てていることであろう。ヨーロッパ中心の歴史観では周辺という扱いを受けがちな旧植民地や海外領土など世界各地の事情をグローバルな視野に立ち解説している。フランコフォニー国際機構がフランス語だけでなく、複数言語の擁護（複数言語

主義)を推進していることも注目に値する。重要なことは、「20 世紀前半にフランスを世界の列強の地位から引きずり降ろしたのと同じ力学——ヨーロッパのナショナリズム、植民地帝国の崩壊、植民地の独立が、逆に、20 世紀の後半にフランス語の返り咲きをうながしたことだ」(p.235) という。例えば、国連は発足当時5つの公用語を定めたが、実務言語は英語だけであった。しかし、1946年にはフランス語を第二の実務言語とする。これは、英語との力のバランスをとるための措置である。多くの国際機関や独立後の旧植民地諸国がフランス語を共通語として使い続けたのも、民族集団間の政治的なバランスを保つためであった。また、北米、カナダの歴史とフランス語保護政策には、言語マイノリティーの切実な努力と試行錯誤がある。本書のようにフランス語の歴史を書き換えようとする壮大な努力も、「フランス以外のフランコフォンも周辺ではない」という主張の実践にほかならない。

「フランス語は17世紀から変化していない」、「フランス語は明晰さの故に世界の外交語となった」など、フランス語にまつわる神話は多いが、著者が膨大な資料を駆使して神話を現実の姿に置き換えていく手並みは痛快ですらある。規範からの逸脱をけって許さないフランス語特有の純粹主義の神話も、フランス語が国際語として生き続けるためにはその功罪を醒めた目で問い直す必要がある。

そもそもフランス語を題材にした本を、フランスの外の視点から、英語で書いたという執筆の姿勢にすでに挑戦がある。英語との関係を二者択一ではなく、相互協力関係へと転換する新たな戦略でもあろう。国際共通語としてのフランス語が健在であるという著者の主張が多くのフランス語話者への激励となっていることは、本書がカナダ首相出版賞審査員特別賞を受けていることから窺える。

Keiko Tsujikawa, (Préface de Jean-Nicolas Illouz), *Nerval et les limbes de l'histoire, lecture des Illuminés*, Droz, 2008, 319 pp.

評者：田村毅（獨協大学特任教授・東京大学名誉教授）

本書は、辻川慶子氏がパリ第八大学に提出した博士論文をもとに出版されたネルヴァル論、「『幻視者（イリュミネ）』読解」（副題）である。題名（筆者の仮訳「ネルヴァルと歴史の辺境（リンボ）」）にあるリンボとは、新生児や古代異教徒など、洗礼を受けずに死んだ人々の魂が墮地獄か救済か未決定状態のままにおかれる場であり、ダンテによれば地獄の周縁にあるとされる。ネルヴァルの愛読者ならば、「夢は第二の人生」で始まる『オーレリア』の冒頭部分が想

起される。眠りに入るなかば混濁した意識に「茫漠とした地下の世界が少しずつ照らし出され、陰と闇の中から、地獄の辺境（リンボ）に宿り、鈍重に動かぬ青白い姿形がいくつも浮かび上がってくる。ついで、その場の輪郭が明確になり、一筋の新たな光がそれらの奇妙な幻影たちを照らし、動き回らせる。——精霊たちの世界がわれわれの前に開かれる。」本書は、ネルヴァルの描く6人の幻視者たちを、「歴史の辺境」にうごめく精霊として理解し、その幻影を映し出す作者の「歴史意識」を明確にしようとする野心的かつ秀抜な試みである。

ネルヴァル研究者にとっては、『幻視者 あるいは社会主義の先駆者たち』（1852年11月刊）は、やっかいな作品である。構成を紹介すると、「叔父の蔵書」という短い導入部分につづいて、章立てのないまま、6人の幻視者たちの伝記が、時代順に並ぶ。「ピセートルの王様（16世紀）ラウール・スピファーム」、「ビュコワ神父の物語（17世紀）」、「ニコラの告白（18世紀）レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ」、「ジャック・カゾット（18世紀）」、「カリオストロ（18世紀）」、「クイントゥス・オークレール（フランス共和国）トラキアの秘法」。

原題「天啓をうけた人々」は、18世紀ヨーロッパに流行した天啓説を奉じる神秘思想家（例えばスエーデンボリ、サン＝マルタン、バーム、バスカリ、ワイスハウプト、等）を漠然と指すが、作中人物たちは必ずしも代表的な天啓者ではない。6人を広義での神秘思想家とみなすことは、疑問が残るとはいえまだしも可能だろうが、副題「社会主義の先駆者たち」に該当する者（代表的なのは例えばサン＝シモン、ピエール・ルルー、ラムネー、等）は、ただちには見あたらず、刊行当初から批評家たちに問題視された。既発表の伝記的記事を寄せ集めて「奇人変人列伝」を目しつつ、二月革命以後の社会情勢から流行語「社会主義」を副題にして編纂された原書には、いわば稿料稼ぎの「つぎはぎされた書物」という評価がつきまどってきた。

他方で原書は、ネルヴァルの神秘思想を語る上で无尽蔵の資料を提供してくれる便利な「書庫」として（やや濫用気味に）利用されてきた。つまり、シュールレアリスム以降、「神秘思想家ネルヴァル」の再評価にともない、神秘思想を解く鍵を与えてくれる資料体として、適当な箇所が引用されてきたのであり、矛盾をはらんだ作品の構成や統一原理などは看過されてきた。

もう一点は、テキストそのものの問題であり、伝記につきものの「引用、借用、剽窃」がふんだんに用いられている原書から、「ネルヴァル独自の（オリジナルな）エクリチュール」を抽出・同定するには、膨大な原材との比較考証が要求される。例えば、レチフ・ド・ラ・ブルトンヌの作品群とネルヴァルの「ニコラの告白」の比較を考えただけでも、途方もない忍耐を要し、誰しもがたじろがざるをえないだろう。辻川氏の綿密な比較考証作業の成果の一部は、

本文中と「補遺」に一覧表として謙虚にまとめられているが、論文全体がまさにこのような読解作業の上に構築され、従来の「つぎはぎされた書物」を、ネルヴァルの「歴史意識」によって統一された一個の独立した作品として示すことに成功している。

ネルヴァルにとっての「歴史意識」とは、回想される完了した過去（シャトーブリアン）でも、歴史学によって再生された過去（ミシュレ）でもなく、いわばつねに再生への可能性を秘めたまま精霊たちの眠る「辺境」に位置付けられる。6人の幻視者たちは、孤立し忘れ去られた個々の存在であるかに見えて、実は古文書から掘り出され（ビセートルの王様、ビュコワ神父）、膨大な作品から引き出だされ（レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ、ジャック・カゾット）、隠された神秘思想から発見される（カリオストロ、クイントゥス・オークレール）ことを待ち望んでいる精霊たちである。彼らの存在を抑圧し、孤立化し、隠蔽してきた権力構造と、権力に対する彼らの反抗の痕跡が、パランプセストの抹消された文字のように、古文書類から、作品群から、再び見いだされる。そして潜在的な抑圧の主体をキリスト教と見なすとき、異教・異端の者たちの反逆の歴史が浮かび上がる。その反逆者たちを結びつける密かな系譜（「火の息子たち」）こそが作品を構成する統一原理であり、すなわちネルヴァルの歴史意識である、と辻川氏は読み解く。本格的な『幻視者』論の登場である。

なお、本論の綿密な読解からともすれば見えにくくなる論旨展開を総合し簡潔に示すイルーズ氏の「序文」が付されており、本文執筆にも大いに参考になった。

石井洋二郎『ロートレアモン 越境と創造』筑摩書房、2008年

評者：立花英裕（早稲田大学）

誰もが本書の分厚さに驚くのではないだろうか。大方の人にとって、イジドル・デュカスは大作家とはいえないかもしれない。このモンテビデオ生まれの青年は、ロートレアモン伯爵の名の下に『マルドロールの歌』を出版し、次に本名で『ポエジー』と題した二つの短いテキストを発表した後、道半ばにして、1870年11月、プロシャ軍に包囲されたパリで謎の死を遂げた。そんな不幸な男の研究書が、日本で、それも彼の残したテキストの量を遥かに越える規模で出版されたのである。

ここで、本書が出版される前の状況がどのようなものだったのか、簡単に振り返っておくのも無益ではないだろう。1990年代は、ジャン＝ジャック・ルフレールの主宰する雑誌「カイエ・ロートレアモン」の下に集まった研究者たち

による伝記的探索が大規模に進められた時代だった。彼らに対する批判がないわけではなかったが、その活動は目覚ましかった。以降、伝記的な調査を発表するなり、作品の部分的な側面に注目して実証的な研究をすることはできても、イジドル・デュカスの作品を包括的に研究することは難しくなったのである。そうした状況に一応の終止符を打ったのが、1998 年に出版された、ジャン＝ジャック・ルフレールによるイジドル・デュカスの伝記的著作だった。この、やはり大部な著述によって、それまで砂塵のように舞い上がっていた伝記的調査研究や、作品の源泉研究の数々が整理され見渡すことができるようになった。しかし、ルフレールの研究は作品を読み直そうというものではない。『マルドロールの歌』をどう読むのかという段になると、むしろ、70 年代のテキスト主義との乖離ばかりが目立ち、大きな空白が生まれていたのである。

その後、続々と、寺本成彦氏の *Travail de la réécriture dans Les Chants de Maldoror de Lautréamont* (2002) や、原大地氏の *Lautréamont : vers l'autre. Étude sur la création et la communication littéraires* (2006) のような日本人による優れた博士論文が出てきたが、それらは、ルフレール以降の断絶を埋めるような総合的な研究とは違うものだった。

石井洋二郎氏の仕事の特徴は、上述の状況を踏まえながら、伝記的な研究の蓄積と作品研究との統合を大胆に目指したところにある。一種の評伝だと言ってもよいが、従来の諸研究を総合するという側面も強く、普通いわれるような評伝のスタイルとは、微妙に異なっている。各章の構成は、イジドル・デュカスの誕生から始まり、それぞれの時期の主な伝記的研究の成果をうまくまとめながら、伝記的事実とテキストとの関係を打ち立てていくという形式になっている。数ある資料の中から伝記的事実として採るべきものを選択するとともに、そこから見えてくる作品の側面に光をあてるという複雑なプロセスである。全体を過不足なく、かつ破綻なく、そして読みやすくまとめていく、その手法は見事である。

このように書くと、本書が過去の研究をまとめただけのようにとられてしまう危険があるが、著者は、食欲に、独自の発見と見解を提示している。たとえば、第 8 章で検証されているエドガール・キネの『アースヴェリユス』との関係は目新しく、説得力に富んでいる。ロートレアモンを専門としていない一般の読者にとっての目新しい情報は、デュカスとウルグアイとの関係かもしれない。そして、本書のタイトルとして用いられている「越境と創造」も、ここに起点が置かれている。石井氏によれば、多言語空間モンテビデオに育ったイジドル・デュカスは、フランス語とスペイン語の 2 言語使用者者だったのであり、しかも、どちらの言語も他方の干渉をうけるために母語たりえない、言語間の越境者だった。イジドル・デュカスは、越境しながら創造していく。

しかし、この越境は、地理上や言語上のそれに留まるのではなく、『マルドロ

ールの歌』の進行とともに、主題論的にもまたエクリチュールのレベルでも押し進められ、ついには「身体なき器官」による「越境の全般化」に至るという。さらには「彼にとって『創造する』とはじつのところ、エクリチュールの実践を通していたるところに越えるべき境界を出現させることでもあったのではないか」と、石井氏は問うている。そして、越境は、ついには、デュカスの個人的な伝記的制約から解き放たれ、ロマン主義という時代的制約からも抜け出て、ポストモダンの地平を切り拓いているというのである。

このように、石井氏は独自の考察をきわめてスケールの大きな視点から展開している。にもかかわらず、一般の読者にも比較的容易に入っていけるような叙述の配慮があり、本書の最大の独自性は、そのような柔軟な文体が練成されているところにあるというべきなのかもしれない。

なお本書は、第 59 回芸術選奨文部科学大臣賞（評論その他の部門）を受賞したことを付記する。

Masao Suzuki, *J.-M.G. Le Clézio, Évolution spirituelle et littéraire. Par-delà l'Occident moderne*, L'Harmattan, coll. « Critiques littéraires », 2007.

評者：中地義和（東京大学）

本書の原形は、2005 年 3 月に、コンパニオン（指導教官）、ヴィアール、ジャルティの各氏と評者の四人を審査員として、パリ第四（旧ソルボンヌ）大学で試問を受けた学位論文である。「審査員一同の賛辞をこめて」という祝福とともに、同大学文学博士の称号が著者に授与された。

ル・クレジオ（1940－）は、大学における文学研究の対象としてすでに広く認知され、近年続々と研究書が刊行されている。優に二十冊を超すル・クレジオ論のなかでも本書は、『調書』（63 年）でのデビューから 2000 年代半ばにいたる四十余年の作家の「精神的変容」と「文学的変容」とをパラレルに捉え、その営みの総体を貫く論理を抽出することに成功したはじめての例として、画期的な意義をもつ。作家が多大な影響を受けたサルトル、ミショー、エリアーデ、アルトールを参照しながら展開される存在論は、モノグラフィーを超える広がりをもつ。

本書の要をなすのは、作家の二重の変容のなかに著者が直観した二度の重要な屈折である。ル・クレジオの初期作品は押しなべて、敵対的な他者（世界）を前に自我の殻に閉じこもり、孤独に苦しむ青年を登場させる。作者の分身に他ならない人物たちはまた、誕生から死に向かって直線状に延びる時間のなかで死の恐怖に戦きながら生きている。自我のドラマと死の強迫というこの二重

の閉塞を破る契機となったのが、兵役代替義務を果たしていた二十歳代に作家が偶然発見した非西欧世界、とくに中米のインディオたちの抱く「コスモス」としての世界像とそこに住まう「宗教的人間」としての彼らの生き方である。それは、個人の実存は「いま」と「ここ」を凌駕する広大な次元に結ばれているという世界観であり、時間は回帰し、先祖の予言ないし夢を子孫が実現するという時間感覚である。

これが著者の説く作家の第一の屈折であるが、本書がル・クレジオ理解に大きな一步を画したのは、この大転換を、インディオの神話や生活、また西欧によるマヤ・アステカ文明の破壊に関する作家の一連のエッセーに基づいて論証するのみならず、小説作品へのその反映を明快に示して見せるからである。75年の『向う側への旅』を境に70年代後半の寓話的なエッセーやフィクションは、個を包み込む聖なる宇宙のヴィジョンを変奏する。さらに、小説に歴史的次元を導入して部族または家族の叙事詩を壮大なスケールで展開する80年代の小説『砂漠』や『黄金探索者』の軸をなすのも、父祖の中断された夢を実現する願望と「コスモス」に結ばれた個人の生の展望であるという解釈は、創作を駆動する原理的な力を捉えて、ル・クレジオの頂点を標す二作品間の紐帯を明かす。

著者によれば、80年代後半にル・クレジオは第二の屈折を見せる。第一の屈折がはらんでいた、西洋近代の独我論や自文化中心主義への批判は、やがて「いま」と「ここ」を唾棄して「過去」と「よそ」を憧憬する懷古趣味と異文化称揚（さかさまの自文化中心主義）に陥った、という否定的裁断が下される。小説においても近年のル・クレジオは、コスモスへの個の帰属といった精神的次元からは遠ざかり、攻撃的で非人間的な「いま」「ここ」をひたすら逃れようとする人物たちを中心に据え、世界を支配する西洋を弾劾してはマージナルな非西洋を称える善悪二元論に陥っているという。

弱者・被抑圧者擁護の言説を指す揶揄まじりの「政治的に公正な」(politiquement correct)という表現を、近年のル・クレジオに当てはめるフランス人識者が少なくない。作家はノーベル文学賞受賞決定直後の会見で、そのような揶揄を突き放すように、「自分はフランスの作家というよりもフランス語圏作家だと感じている」と銜いなく明言した。本書の著者が、この種のお手輕なラベルを排し、テキストの読みに即して、自身の言葉で、ル・クレジオにおけるそうした面を炙り出しているのは特筆すべき美点である。

評者も近年の作家をめぐるこの否定的評価を大筋において共有する。しかし、あえて留保を呈するなら、この観点からの断罪だけで80年代後半以降の作品を総括するのは単純に過ぎる。たとえば、『彷徨える星』(92年)や『黄金の魚』(97年)は、まずは、無防備なまま世界に投げ出された思春期の少女たちの痛みと成長の物語として読まなければならない、肝心の部分を看過することになるだろ

う。文字どおりの自伝的小説といえる『オニチャ』(91 年)や、アフリカで巡回医師の職務に生涯を捧げた父親の肖像に託して間接的に自らを語る『アフリカのひと』(04 年)は、ある年齢に達した作家の、自己の起源と形成をめぐる切実で甘美な問いに動機づけられていないだろうか。

かつて「ロンド」と題する短篇を教室で読んでル・クレジオに惹かれた若者が、その感銘に忠実に研鑽を積み、十数年後にかくも充実した研究書を刊行するにいたったことに、脇で見守ってきた評者も格別の感慨を覚える。明快でニュアンスに富む、それでいて重厚に沈まずある種のエレガンスすら漂わせる博士論文が、フランス語を母語としない著者によって書かれたことを、審査員たちは異口同音に称賛した。本書が著者自身の手で、原書に劣らず明快でニュアンスに富む和書になれば、かねてからの熱心なル・クレジオの読者、また昨年の受賞を機にこの作家に興味をもちはじめた読者にとって、格好の導きとなるに違いない。その日が遠からず来ることを期待したい。

吉田城、田口紀子編『身体フランス文学 ラブレーからプルーストまで』
京都大学学術出版会、2006 年

評者：松澤和宏（名古屋大学）

今は亡き吉田城氏を中心となって組織されたフランス文学における「身体」をテーマとした共同研究が、読み応えに富む論文集に結実したことは慶賀に耐えない。

まず序章では石井洋二郎氏によって、従来の心理＝真理へ至るための媒介として身体を扱うのではなく、様々な意味作用が交錯する磁場として身体を捉えることが説かれ、「心理」や「感情」といった主題自体が、実はすぐれて身体的な事象にほかならないという大胆な展望が提示され、三つの作品の範例的な読解が提示されている。

第一部「アンシャン・レジームにおける世界と身体」では、宮下志朗氏が、ラブレーの作品に登場する巨人ガルガンチュアが、『大年代記』では、オリエント生まれのせい、ワインをうけつけず、シードルを飲み干すが、やがてワインを飲みまくることでフランスという文化的政治的な身体が形成され、このワインが黒胆汁（メランコリア）との間にアナロジーを樹立する過程を明らかにしている。永盛克也氏は絶対王政と悲劇との間の相互的な関係を「王の身体」を中心に読み解き、秋山伸子氏は宮廷バレエの台本の検討を通して宮廷祝祭における王のイメージに丹念な分析の光をあてている。増田真氏は、身振りを人間の言語の起源として見なしていたディドロが、表情や叫びのように身体が語

際の力強さや生命力を高く評価していたことを具体的に例証しながら、心身問題や身体政治学にまで説き及んでいる。

「第二部 ロマン主義からレアリスムへ」では、まず水野尚氏が、ネルヴァルが『オーレリア』においては、時空を越えていく魂とは対照的に、今ここに存在する身体意識の残存が分身や輪廻転生と繋がっていること、そしてこの時空の一点に狂気の中での存在感覚が内包されることを明らかにしている。石井洋二郎氏は『マルドロールの歌』における身体なき器官の諸相を論じながら、マルドロールが主体でも客体でもなく両者を貫通する「通体」 *trajet* であると結論している。小倉孝誠氏は、サウンドスケープ（音の風景）という概念を手がかりにして、文化現象として都市空間に響く産業革命の音と伝統的な教会の鐘を対比しながら、「音の文学史」を試みている。吉田典子氏はゾラの『獲物の分け前』のルネを『ボヴァリー夫人』のヒロインと比較しながら、ルネのモードが身体によって演じられる表層のスペクタクルであり、そこには空虚の悲劇が潜み、さらに織物としてのテキストの紋中紋（アビーム）的機能が働いていることを指摘している。

「第三部 ベル・エポックの華やぎの蔭で」では、森本淳生氏はヴァレリーの『若きパルク』の構造を意識と身体が相克する人間の在りようを提示したものと読み解いている。吉田城氏のブルーストに関する最初の論考は、オデットの裡に身体「ずれ」や「ゆがみ」を看取して、ブローニュの森を散歩するスワン夫人の二面性、すなわち「王侯貴族の気品と高級娼婦の媚が渾然一体と融合した特異な様相」に草稿の分析を交えて光をあてている。二番目の論考はブルーストの性的失敗の体験が、『ジャン・サントウィユ』の主人公の体験にどのように反映され、『失われた時を求めて』ではどのように曖昧化されるに至っているかを丹念に辿っている。

「第四部 時代を超える身体」は、時代順ではなくテーマに即した論考を収めている。多賀茂氏は、怪物的身体をめぐる19世紀を境にある種の転換が起こっていることをフーコーなどを参照しながら明らかにしている。田口紀子氏は、近代小説における登場人物のポルトレの歴史の変遷を辿りながら、18世紀中頃までの詳細なカタログ的描写に代わって一人称の「私」にとっての印象や意味が前景を占めるようになり、バルザック的な風俗小説では時代の換喩の意味を担う記号の身体が現れてくることを鮮やかに示している。大浦康介氏は、言葉と身体の出会う特権的ジャンルとしてポルノグラフィーを捉え、サドなどのリベルタン小説において性的身体の名指しが興奮を呼び、その極限が神への冒瀆であることを鋭く指摘している。

以上駆け足で紹介した論考に加えて、本書には要を得た「時代と展望」および読者に親切な「参考文献解題」がある。本書は、さながら事典のような広がりや専門研究の深みを兼ね備えている。身体をめぐる文学研究をより実りある

ものにするために、最後に若干私見を書き添えておこう。ファブリオを含む中世文学に触れられていない点が惜しまれるが、性急な注文であるかもしれない。また今後掘り下げられるに恰好の主題としては、近年喧伝されているモンディアリザーションをはじめとする普遍主義的な理念に抗して、時空の桎梏を生きるほかないローカルな〈身体〉の再評価を挙げることができるだろう。

柏木隆雄『交差するまなざし—日本近代文学とフランス—』朝日出版社、2008年

評者：私市保彦（武蔵大学名誉教授）

二国間の文学を比較するときは、いずれの国の文学にも深く根を下ろしていなければならないというのが評者の持論であるが、その意味では、本著は理想の書であるといえよう。仏文学のすぐれた研究者であると同時に日本の文芸に通暁している著者にしてはじめて、ゾラ、メリメ、ルナールといった日本の近代に大きな影を映したフランス作家たちが、紅葉、漱石、龍之介、鏡花、太宰、岸田などの作家たちにいかなる変奏曲を奏でたかを説得力をもって詳述できた、ということが感得できる好著である。

序章で取りあげられているバルザックと馬琴のばあいには、影響の分析ではなくて、いわゆる対比研究である。バルザックと江戸文学の対比であれば西鶴という選択肢もありうるが、『水滸伝』などに構想の種をえて波瀾万丈の『南総里見八犬伝』を書きついで馬琴と無数の人物が活躍する浩瀚な『人間喜劇』を構想したバルザックが、共にブルジョワジーあるいは町人の勃興期に生まれ、出版ジャーナリズムの興隆の波に乗り、18世紀までの文物もたっぷり吸収して、壮大な連鎖小説を生みだした等々をはじめとするさまざまな指摘を読むと、両作家の相似が実感をもって浮かびあがってくるのは否定できない。とりわけ、近代日本が馬琴流の伝奇小説の世界を捨象してしまい、壮大なスケールのヒーローたちが雄飛するバルザックの世界に目を向けることなく、仏文学ではメリメ、ドーデ、モーパッサンなどの世界に沈潜していったため、より豊穡な文学を創造する契機を失ったとする趣旨の見解は、評者の日本近代文学観と軌を一にしている。

第一章の〈「フランス」との邂逅〉では、いよいよ「交差するまなざし」が映しだされてくる。この章では、フランス文化とフランス語を日本に導入した村上英俊の仕事や、玉虫左大夫、福沢諭吉などの先覚者たちの欧米滞在記のみだけでなく、ヴェルヌの『八十日間世界一周』の日本の叙述に「世界一周」誌の記事を通して影響をあたえたアンペールや、ボヴォワール伯爵、ジグフリー

ド、コラッシュなどの日本滞在記の興味深い紹介もあるからだ。

第二章からは、ゾラ、メリメ、ルナールといった作家たちが近代の作家たちにはいかなる刺激をもたらしたかというドラマに踏みこんでゆく。ここでも、著者が仏作家のそれぞれについて深い知識を蓄えている一方、紅葉、漱石、龍之介をはじめとする日本の作家も読みこんでいるので、日本作家たちがフランスの作品とどのように向き合ったかということが、つぎつぎに明らかにされている。ここで著者は、古典や中国からの日本での伝統的な「本家取り」の手法とは微妙に一線を画しながら、近代作家たちが仏作品をさまざまな眼差しで取り入れていたとする。ゾラについていえば、荷風がゾラの作品を翻訳・翻案する一方で、ゾラの『制作』や『ムレ神父のあやまち』が紅葉の『むき卵』や『戀山賤』といった創作を生みだしているさまを、具体的なテキストの対応をしながら、従来の比較論を説得力をもって深めている。

メリメとルナールの事例にいたっては、著者の微細な目が光り、著者の独壇場といったおもむきがある。いちばん頁が割かれているのはメリメのばあい、ここでは、ロマンチックなメリメが漱石に、ファンタスティックなメリメが鏡花に、セプティックなメリメが龍之介に、ヌヴェリストとしてのメリメが太宰に受容されていると、作家によって受容の側面がちがうさまを分析している。とりわけ、出自、成長、感性、資質、華々しいデビューなどに、龍之介とメリメの相似を見ながら、ついに龍之介がメリメたりえなかった袋小路におちいるさまに迫っているくだりには、両作家をともに深く透視する視覚が生きている。それなくしては両者の関係を語るなかれといった好例でもあろう。

鏡花のばあいは、メリメの痕跡にくわえ、『梟物語』にはユゴーの『ノートルダム・ド・パリ』の影があることなども説得力をもって指摘されている。例えば鐘楼守、作蔵はカジモドをなぞって造型されているとしているが、こうした例証は、明治期の作家たちがいかに外国作家からインスピレーションをえていたか、改めてわからせてくれる論である。

ルナールとなると、臆面もなくルナールが乗りうつったような文を書いた岸田國士、ルナール風のひねった文章を書いた龍之介、メリメ、ルナールの筆法を韜晦した太宰と、三人三様のルナールへの傾きを描きだしている。メリメのばあいでもルナールのばあいでも、これら日本の近代作家たちにおいて、メリメやルナールといった元像から三人三様の表現と生き様が逆照射されているといつてよい。そもそも著者は、近年日本文学に関心を示しはじめたフランスからの日本へのまなざしがさらに強く向けられるであろうという期待を終章で語っているが、じつは本著こそ、明治期に日本の作家たちが傾倒した仏作家から日本の作家に向けられたまなざしを浮かびあがらせた労作ではないか。

評者：西岡亜紀（お茶の水女子大学大学院研究員）

本書は、日本の近世から現代までの女性俳句を通史的に編んだ仏訳選集である。既に俳句を中心とした日本の短詩型の仏訳の実績がある見目誠氏とフランス俳句振興協会（l'Association pour la promotion du haïku francophone）の主宰 Dominique Chipot 氏による共訳と聞けば、それだけでも安心だが、果たして、人間と詩と 2 つの言語に対する訳者の深くやさしい眼差しの行き届いた充実した訳書となっている。

まず本書が画期的なのは、冒頭でも述べたように、近世から現代の日本の女性俳句のみを通史的に辿った点である。フランスには、既に多くの俳句の訳や研究があるが、そこでは、芭蕉、蕪村、一茶、子規などをはじめとする男性俳人が中心的に取りあげられてきた。思えば日本でフランス詩が語られるとき、多くは男性の詩である。翻ってフランスでも、小説に比べると詩については男性が中心に扱われてきた。こうした風土ゆえ、日本の女性俳句も積極的に仏訳されてこなかったのかもしれない。そこに、表紙に深緑と緋色を背景として栄水の浮世絵「丁子屋内雛鶴」を配し、角に緋色で「紅脣」と記した粋な装丁の女性俳句選集 *Du rouge aux lèvres* が投じられた。その意味は大きいと言えるだろう。またこれは、近年の日本の俳句における女性人口の増加、女性俳句に関する出版の充実に連なる動きとして、比較文化的観点からも注目できることである。

全体の編成は次の通り。千代尼、杉田久女、橋本多佳子、三橋鷹女、中村汀女の、最も著名な俳人には敬意を込めて、24 句ずつ採録する。戦前生まれの俳人（星野立子、桂信子ほか計 25 名）からそれぞれ 12 句、戦後に生まれた俳人（西村和子、黛まどかほか計 10 名）のものは 6 句ずつ、作家毎にまとめて掲載している。これにアマチュアの女性が原爆を詠んだ俳句を 12 句、「原爆俳句」（*Haïku de la bombe atomique*）と括って、戦前と戦後の作家の間に挟む。従来の仏語選集にも女性俳人が含まれてはいたが、作家一人当たりの句数は本書で充実したと言える。また、片山由美子や奥坂まやなど、ほとんど仏訳されていない戦後作家を含めたことも新しい。さらに、作家毎に経歴と著作の概説がつき、巻末に書誌も備えるので、女性俳句に関心のある仏語圏の研究者の入門書にもなるだろう。

訳の内容は全体的に、なるべく説明を省いた短い言葉に収めていく方針に貫かれているようであり、読者の自由な解釈を残す。形式は、日本語の原句とローマ字表記の仮名読みと 3 行の訳詩とがセットになっており、かつそれらが水平に並べられている。一例として、以下に細見綾子から 1 句引用してみよう。

でで虫が桑で吹かるゝ秋の風
dedemushi ga kuwa de fukaruru aki no kaze

Le vent d'automne
souffle un escargot
sur la feuille de mûrier. (p.105)

この形式では、日本語の持つ視覚的イメージ（漢字や仮名文字の質感。例えば「桑」と「吹かるゝ」の形の連想）、仮名読みが醸す聴覚的イメージ（例えば「でで虫」の音の滑稽、「吹かるゝ」の流麗）、そしてフランス語の音と意味が担うイメージ（例えば「Le vent d'automne」の含む背景）の3つが、ほぼ同時に提示される。仮にフランス語しか解さない読者でも、ローマ字と訳詩とは併せて読めるので、少なくとも、俳句の訳しにくい要素のひとつと言える17音節を拾うことはできるはずだ。また、日本語がわかれば、5・7・5の音数律、季語や切れ字の語感、訳すと同じ語になってしまう「師走」／「歳暮」(fin d'année)、「女」／「をんな」(femme)、「薔薇」／「薔薇」(rose、ルビ筆者)のニュアンスの違いや、「でで虫」と「escargot」の意味のずれなどを味わうこともできる。そして最終的には、3つの表記から読み取るイメージの交感から、読者自らがイメージを構築できる。つまりは、内容説明を最小限に、形式によって翻訳不可能な要素を補うことで、二言語間の誤差を読者が埋めるのを促し助ける形式と言えるだろう。一方で日本の読者は、3種類の「haiku」の読み比べから、原句や日本語への再解釈を刺激される。国際俳句時代のひとつの翻訳形式としても興味深い。

さらに、句の選定にも工夫がある。例えば「秋風や水より淡き魚のひれ」（三橋鷹女）、「白桃や人刺すごとく刃を入れて」（鈴木真砂女）など、具体的な情景を想像しやすい句が多く選ばれているようである。一方で「夏痩せて嫌ひなのは嫌ひなり」（鷹女）、「羅や人悲し恋をして」（真砂女）など、境涯や日本特有の情緒の濃い作品は、代表句であっても入っていない。広い読者に向けて、言葉自体から音、匂い、色といった、ある種普遍的なイメージを喚起できる句を選んだと思われるが、改めてこういう種類の句が集められると、俳句という定型が、現実の情景に深く根ざすものであることを再認識する。また、この芸術が言語を越えたところに、ほとんど本質的に担う象徴性についても考えさせられる。

以上、本書の訳書としての要素に着目して紹介したが、本書が文学作品集である以上、もちろん一作品として語りたい魅力も大変多くあった。世界の幅広

い読者に、それぞれの視点からの多様な解釈と実りをもたらす本として、受け入れられることを願う。

小畑精和、竹中豊（編著）『ケベックを知るための 54 章』明石書店、2009 年

評者：西川葉澄（上智大学非常勤講師）

フランスは遠いが、ケベックはもっと遠い。地理的にはもちろんのこと、心理的にも、ケベックは遠い。この距離感はどこから由来するのか、素朴な雑感から始めれば、日本からケベック州へ行くには英語圏を経由することになるという事実が、ケベック州が英語圏の海の中の孤島なのだというイメージを無意識に与えるからなのか。または「北国」のイメージが最果てを連想させるからなのか。「恐るべき冬の寒さ」というイメージはケベックに対するステレオタイプの一つだが、ケベックに関する我々のステレオタイプには、実は驚くほどバラエティがない。ケベックといえばメープルシロップで、観光なら秋の紅葉とケベックシティとモントリオール。だいたいメープルシロップもモントリオールも、ケベックシティでさえ英語である。フランス語圏なのに我々に流通するイメージの記号は英語であり、逆にいえばカナダなのにフランス語圏であり、しかもフランス語圏なのにフランスのフランス語が通じないという偏見やもちろん事実（あるいは初期的錯覚というべきか）。このようにケベックは一見しただけでも複雑な地域であり、神秘的な国ケベックといってもやぶさかではないのではないか。つまりケベックは北米のフランス語圏として広く認知されているものの、それが具体的にどのような地域であるのかということに関しては、日本ではあまり知られてこなかった。

本書は、「まえがき」にも記されているように、精力的に展開されてきた明石書店のエリア・スタディーズ・シリーズの中で、「初めて一国内の特定州をとりあげた」ものであり（シリーズの 25 番目に『カナダを知るための 60 章』があるが、ケベック州に関する本書は 72 番目である）、そのような例外性はまさにカナダの州の一つでありながら、他の州とは異なる言語、文化、アイデンティティを保持し、「ネーション」として機能するケベックを直截に示しているだろう。そうした野心的な試みでもある本書は、その複雑で豊かな歴史のために外部から眺めた時に一見して矛盾と映ることにに関して、ケベックを理解するために手ほどきとなる格好のガイドとなるであろう。ケベックの地理や歴史、政治、経済、またいかにしてその独自の社会が形成されるに至り、アイデンティティの問題がどのように変遷し、現在広く知られるように華やかな文化的活動の発信地の一つとして注目を集め、今日まで至るのかという、ケベックに対する知

的好奇心と読者の興味を惹きつける 60 の章が 27 名の執筆者によって、さまざまな角度から光を照射された多面体のように、ケベックの現在を紹介しているのである。一人の著者の限られた視点からではなく、このように各分野の専門家たちによって執筆された多彩な章により、客観性に富んだ信頼のおけるケベック地域研究の入門書を得られた喜びは大きい。

とりわけ、その負の歴史を知ることなしにはケベックの現在を理解することは不可能だが、竹中豊氏による第 2 部には、「フランス的事実」のルーツともなったフランスからの植民活動とイギリスとの植民地戦争での敗北、被支配階級に甘んじた時代からナショナル・アイデンティティが形成されるまでの背景が明確にまとめられている。また、独自の社会形成への鍵ともなるケベックのナショナリズムについては古地順一郎氏による第 10 章、および丹羽卓氏による第 20 章などから学ぶところが多いだろう。そして、前述した英語とフランス語の問題だが、とりわけ矢頭典枝氏による第 21 章「フランス語憲章」をはじめ、第 22 章、また寺家村博氏による第 23 章に詳しい。そして舞台芸術や文学に支えられた豊かなケベック文化については本書の約半分が割かれており、このページの量自体がすでにケベックの文化的豊饒性を示唆しているだろう。本書の後半では、ケベック文学についての小畑精和氏による数章を始めとして、いまや知らぬ者はいないシルク・ドゥ・ソレイユに至るまでのケベック文化をほぼ網羅しており、ケベックの文化の幅広さに圧倒されることだろう。そしてケベックの独自のアイデンティティやナショナリズムは決してそれ自体独立したものではなく、このような文化的活動とそれぞれ有機的な螺旋状に絡み合いながら発達してきたということが、本書を読み終えたときに生き生きと実感された。巻末に付されたケベック歴史年表は、この有機的なケベックの歴史を通時的に捉えなおすことに役立つだろう。そして「ケベックを知るための文献・情報ガイド」は、本書が読者に対して開いたケベックのドアから、さらに一步踏み出すための貴重な手掛かりを与えるに違いない。

書評対象本推薦のお願い

日本フランス語フランス文学会では学会ニュースおよび学会ホームページにて公開する書評作成にあたり、広く対象となる本を募集しています。つきましては、下記の要領により、書評対象として相応しいと思われる本をご推薦いただければ幸いです。

なお、ご推薦いただいた本は資料調査委員会で集計し、書評する本を決定させていただきますので、必ずしもご推薦いただいた本の全てが書評されるわけではありません。

◇ 目的

日本におけるフランス語、フランス文学研究の成果を収集し、権威付けされた書評ではなく、内容紹介的な書評により公開する。

◇ 書評の対象

原則として、過去1年間に刊行され、その内容から広く紹介するに相応しい学会員による著書を対象とする。翻訳なども含み、日本で刊行された著書には限らない。フランス文化、映画などに関する著書も排除はしない。

◇ 推薦要領 他薦に限りません。著者名・書名・出版社名・発行年月を明記の上、紹介文（200字程度）を付してください。推薦する著書を送付する必要はありません。

◇ 締め切り 毎年3月・9月末日

◇ 宛先 日本フランス語フランス文学会事務局までお送りください（メールも可）。

cahier 04

編集 資料調査委員会

発行日：2009年9月15日

日本フランス語フランス文学会

150-0013 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 日仏会館 505

TEL:03-3443-6671 FAX:03-3443-6672 MAIL:sjllf@jade.dti.ne.jp